

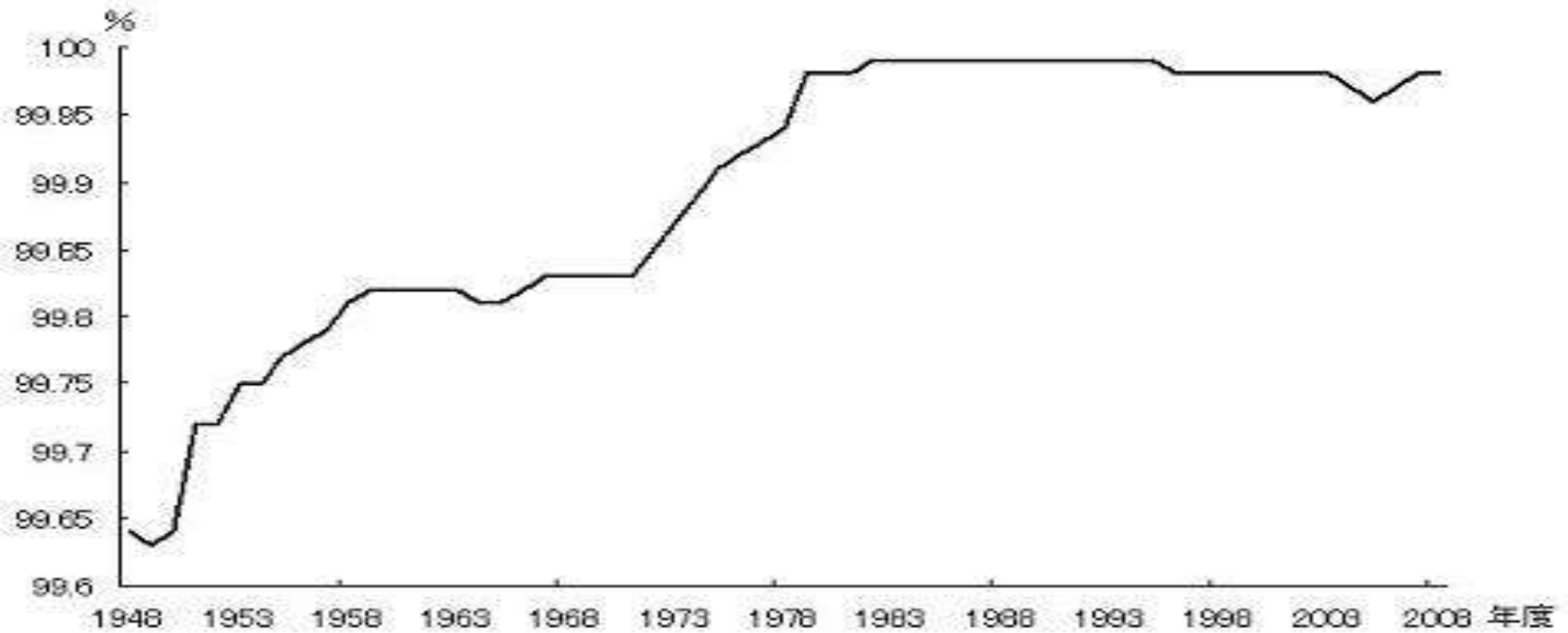
不登校

～不登校と社会の関係～

すずき医院 鈴木美穂

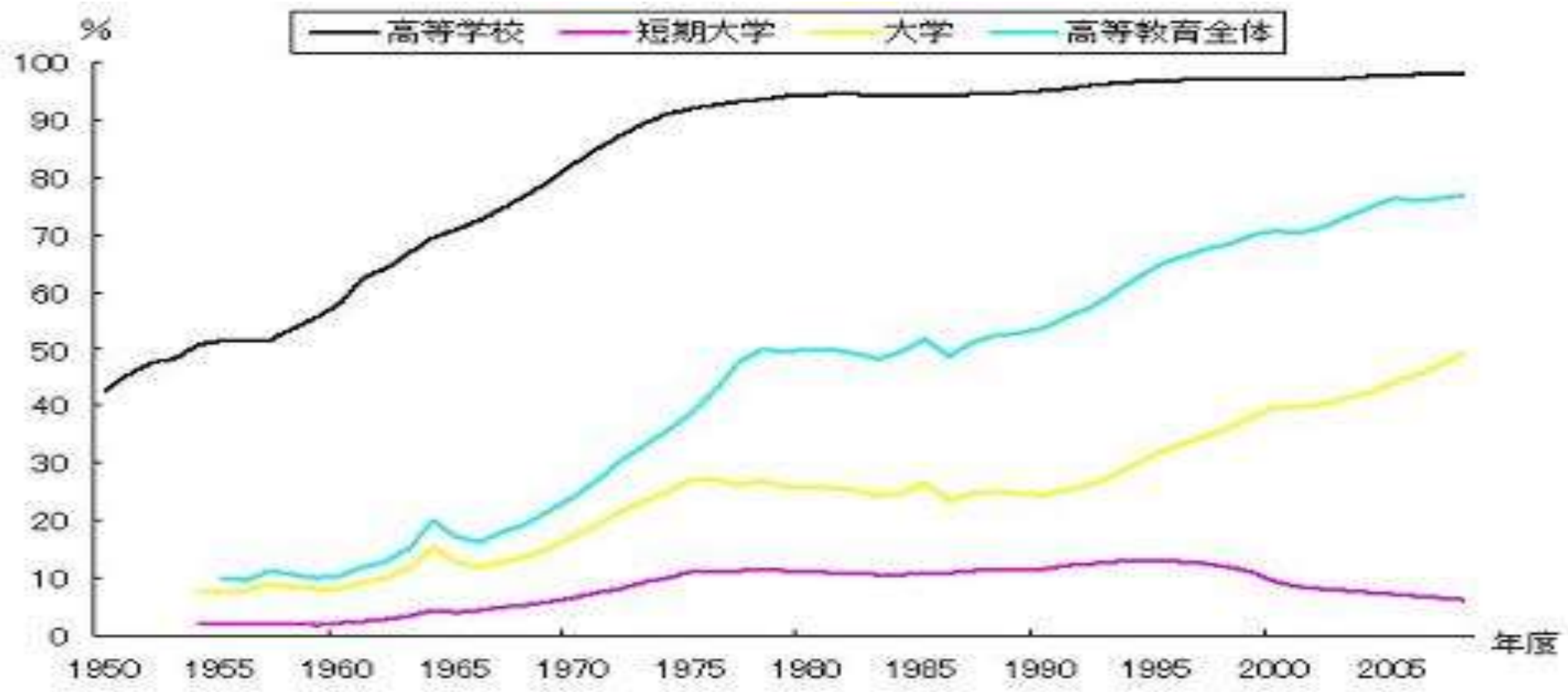
日本における学校の位置①

就学率の推移



日本における学校の位置②

進学率の推移



日本における学校の位置③

法的意味

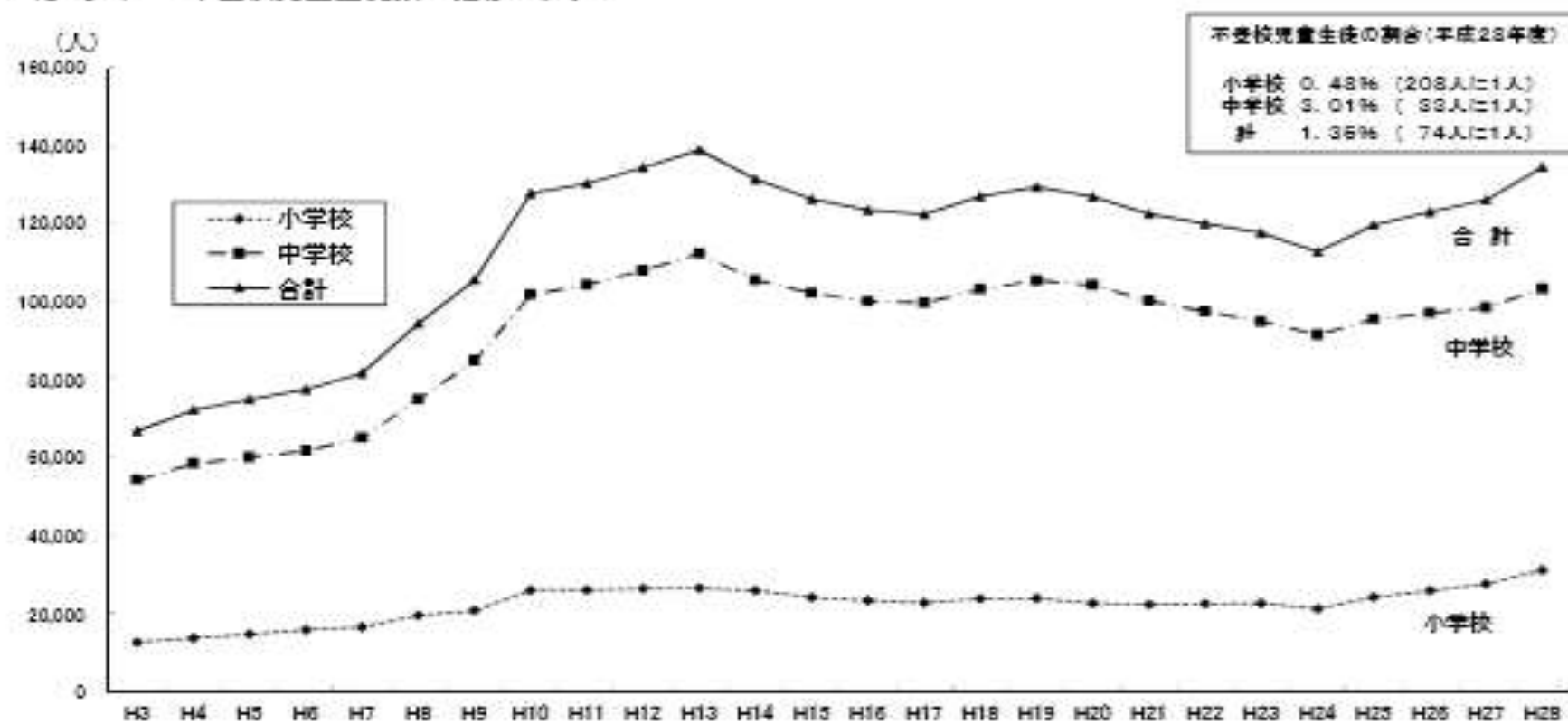
- すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。― 日本国憲法第26条第2項
- 保護者が6歳～15歳の子供を学校に通わせる就学義務がある。

現代の不登校の定義

文部科学省によると、不登校とは「なんらかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくともできない状況にあること（ただし、病気や経済的な理由によるものを除く）」とされています。尚、当該年度間に、連続または断続して30日以上学校を欠席した児童生徒数を不登校児童生徒としています。

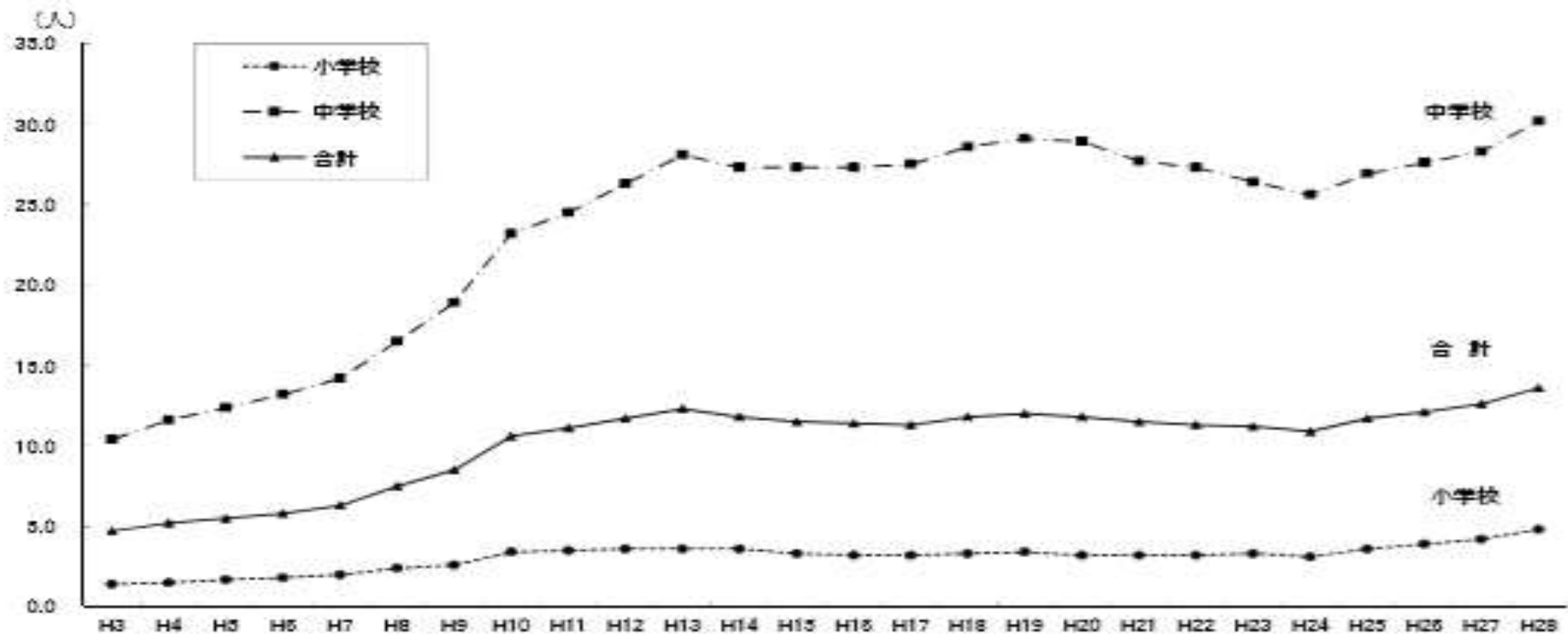
不登校数の推移 (H28年度文部科学省調査)

<参考1> 不登校児童生徒数の推移のグラフ



不登校数の推移 (H28年度文部科学省調査)

<参考2> 不登校児童生徒の割合の推移のグラフ(1,000人当たりの不登校児童生徒数)



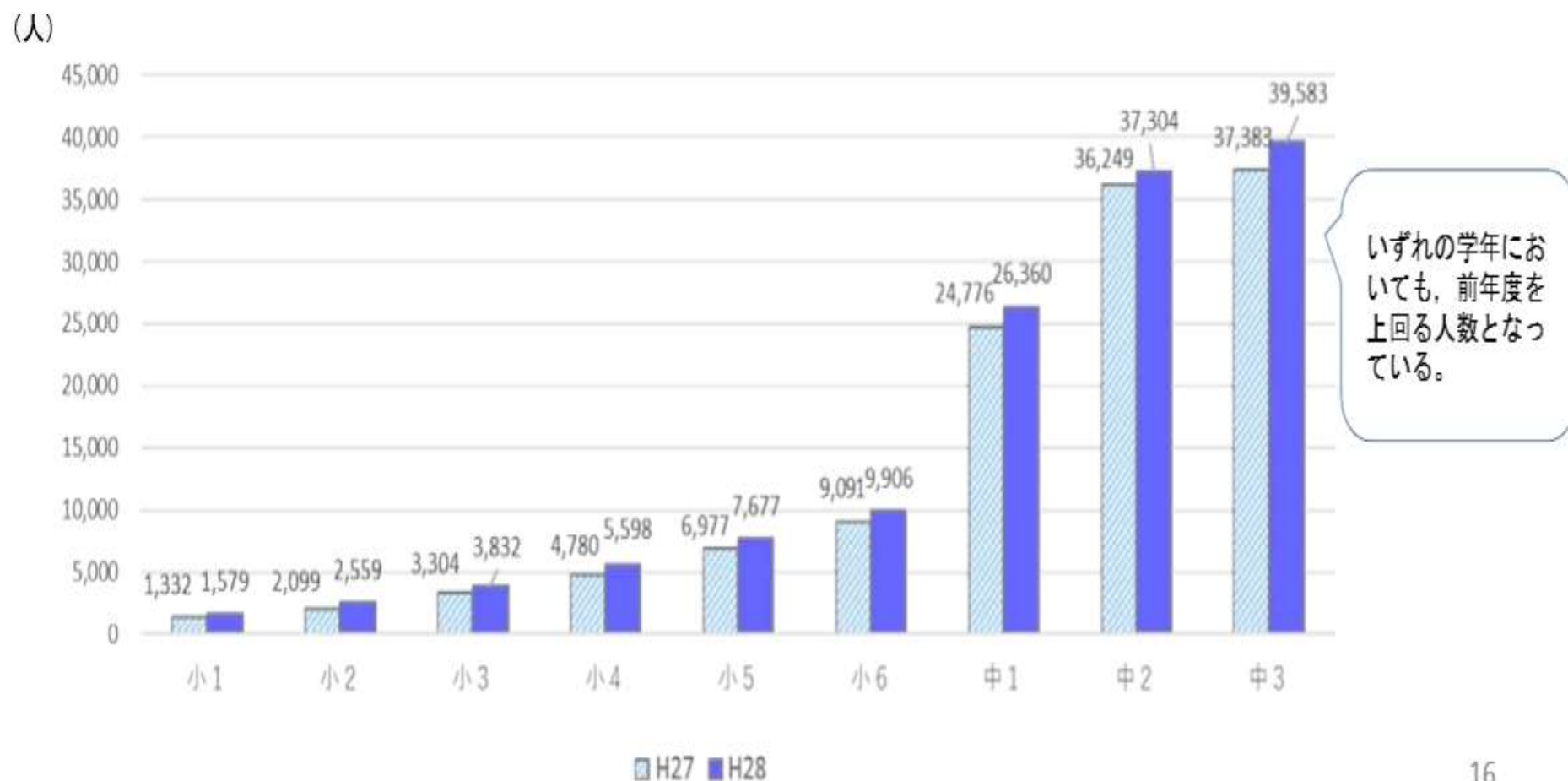
(注) 調査対象：国公立小・中学校（小学校には義務教育学校前期課程、中学校には義務教育学校後期課程及び中等教育学校前期課程、高等学校には中等教育学校後期課程を含む。）

欠席日数別調査 (H 2 8 年度文部科学省調査)

区分	欠席日数30～89日の者		欠席日数90日以上で 出席日数11以上の者		欠席日数90日以上で 出席日数1～10日の者		欠席日数90日以上で 出席日数0日の者		不登校 児童生徒数
小学校	17,413	55.9%	11,506	36.9%	1,354	4.3%	878	2.8%	31,151
中学校	39,535	38.3%	51,110	49.5%	8,519	8.3%	4,083	4.0%	103,247
合計	56,948	42.4%	62,616	46.6%	9,873	7.3%	4,961	3.7%	134,398

※ パーセンテージは、各区分における不登校児童生徒数に対する割合。

学年別不登校児童生徒数 (H 2 8 年度文部科学省調査)



長期欠席の状況について (H28年度文部科学省調査)

事由別中長期欠席者数

(人)

区分	年度	在籍児童生徒数	病気	経済的理由	不登校	その他	うち、「不登校」の要因を含んでいる者	計
小学校	平成27年度	6,543,104	19,946	18	27,583	15,544	3,387	63,091
	平成28年度	6,491,834	20,323	16	31,151	16,308	3,786	67,798
中学校	平成27年度	3,481,839	21,118	31	98,408	12,250	4,854	131,807
	平成28年度	3,426,962	22,488	21	103,247	13,452	5,951	139,208
高等学校	平成27年度	3,325,301	14,266	1,606	49,563	13,922	2,957	79,357
	平成28年度	3,315,453	14,390	1,264	48,579	15,192	3,703	79,425
合計	平成27年度	13,350,244	55,330	1,655	175,554	41,716	11,198	274,255
	平成28年度	13,234,249	57,201	1,301	182,977	44,952	13,440	286,431

※ 在籍児童生徒数は、平成28年5月1日現在。

※ 年度間に連続又は断続して30日以上欠席した児童生徒数を理由別に調査。

①「病気」とは、本人の心身の故障等（けがを含む。）により、入院、通院、自宅療養等のため、長期欠席した者。

②「経済的理由」とは、家計が苦しく教育費が出せない、児童生徒が働いて家計を助けなければならない等の理由で長期欠席した者。

③「不登校」とは、何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、児童生徒が登校しないあるいはしたくともできない状況にある者（ただし、「病気」や「経済的理由」による者を除く。）をいう。

④「その他」の欄には、上記「病気」、「経済的理由」、「不登校」のいずれにも該当しない理由により長期欠席した者。

*「その他」の具体例

ア 保護者の教育に関する考え方、無理解・無関心、家族の介護、家事手伝いなどの家庭の事情から長期欠席している者

イ 外国での長期滞在、国内・外への旅行のため、長期欠席している者

ウ 連絡先が不明なまま長期欠席している者

エ 欠席理由が二つ以上あり（例えば「病気」と「不登校」）、主たる理由が特定できない者

※ 「その他」の「うち、『不登校』の要因を含んでいる者」とは、上記④エに該当し、複合する欠席理由の1つが「不登校」である者を計上。

不登校の要因

現代の不登校の要因と考えられる事は、友人関係の問題・学業不振・体力不足・無気力・不安・発達の問題・家庭環境に関わる問題など様々。また、これらが重なり合っている事も多い。さらに、不登校児童生徒自身が、なにが問題か気が付いている場合や、何が問題か気が付いていない場合、気が付いていても問題を人に話す事に抵抗がある場合もあり、不登校の要因は見えにくい事も多い。

学校へ通う意味の変遷と不登校

有史からの教育

大人が子供に、この世界で生きていくのに必要な知識・技能・体験を教えるという意味での教育は、人類が誕生して以来、自然と継続されてきた。

学校へ通う意味の変遷と不登校

学校の始まり

18世紀末、西欧で王侯貴族が治める君主国家から、国民自ら治める国民国家が誕生した。国民国家が誕生するには、人々が共通の知識・技能・体験（文化）をともにして、同胞として一体感を持つことが必要となり、そのためのシステムとして学校制度（公教育）が誕生した。加えて、社会の経済的・文化的な発展のためにも教育の発展が求められていた。

学校へ通う意味の変遷と不登校

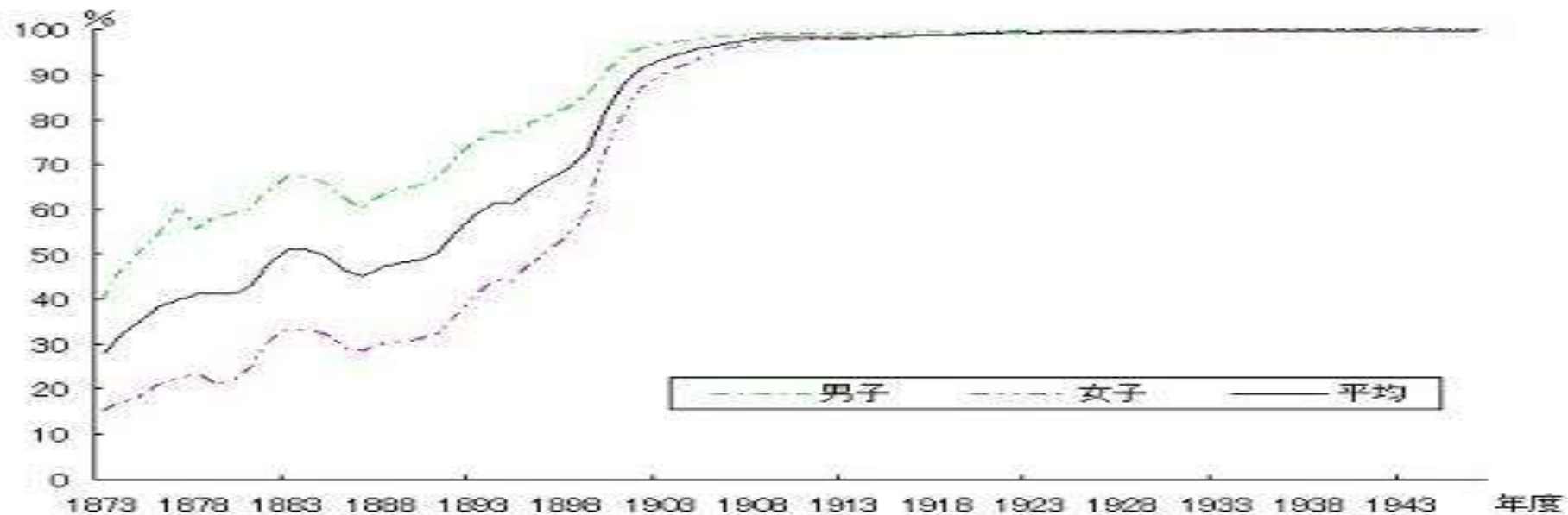
学校教育以前の日本

江戸時代には、士農工商の厳格な身分制度があり、それぞれの身分に応じて、子供が大人に向かって歩むレールが定まっていた。親の職を受け継ぎ、その職で生きていく時代だった。農家の子は親の手伝いをしながら農業を学んで生きる糧を得、職人の子は親の手伝いや丁稚奉公をしながら職人仕事を学んで生きる糧を得た。

学校へ通う意味の変遷と不登校

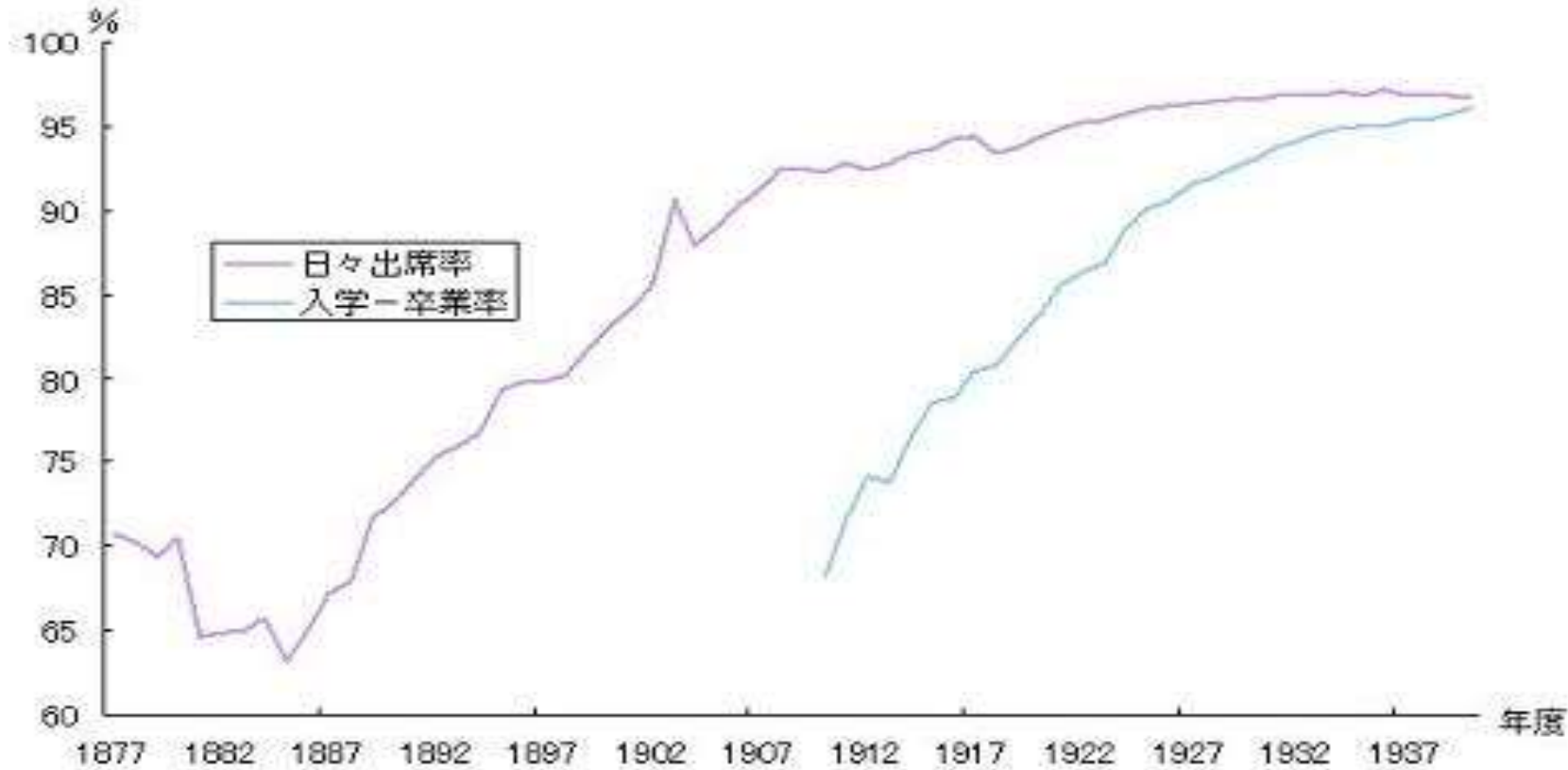
日本の学校制度の始まり

1867年の明治維新から近代国家の道をふみだした日本も、西欧に倣い、1872年の「学制」により、学校制度を立ち上げ、全国各地に学校を作った。（図は就学率の推移：文部省）

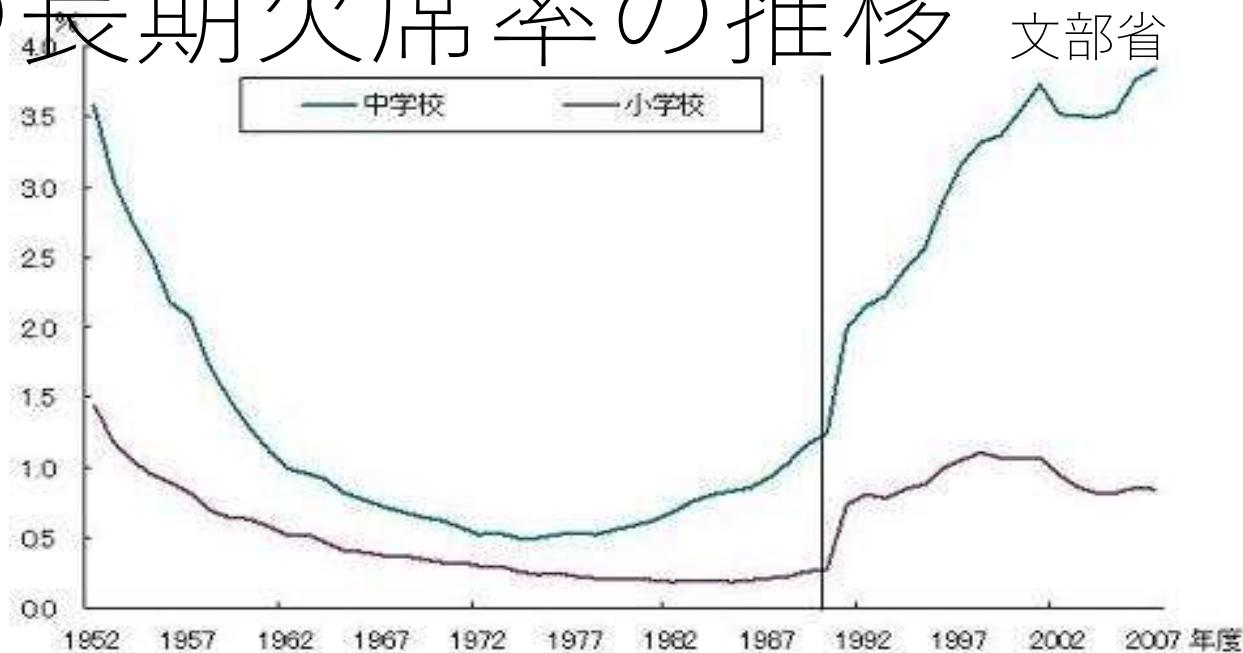


学校へ通う意味の変遷と不登校 戦前の学校制度の普及

日々出席率と入学－卒業率の推移（1877～1940年度） 文部省



学校へ通う意味の変遷と不登校 戦後の長期欠席率の推移



出典) 1952-59年度データは文部省『公立小学校・中学校長期欠席児童生徒調査』

1960-2007年度データは文部（科学）省『学校基本調査』各年度より。

注) 1991年度から、年間30日以上欠席者が長期欠席者となった。それ以前は、年間50日以上欠席者が長期欠席者。

学校へ通う意味の変遷と不登校

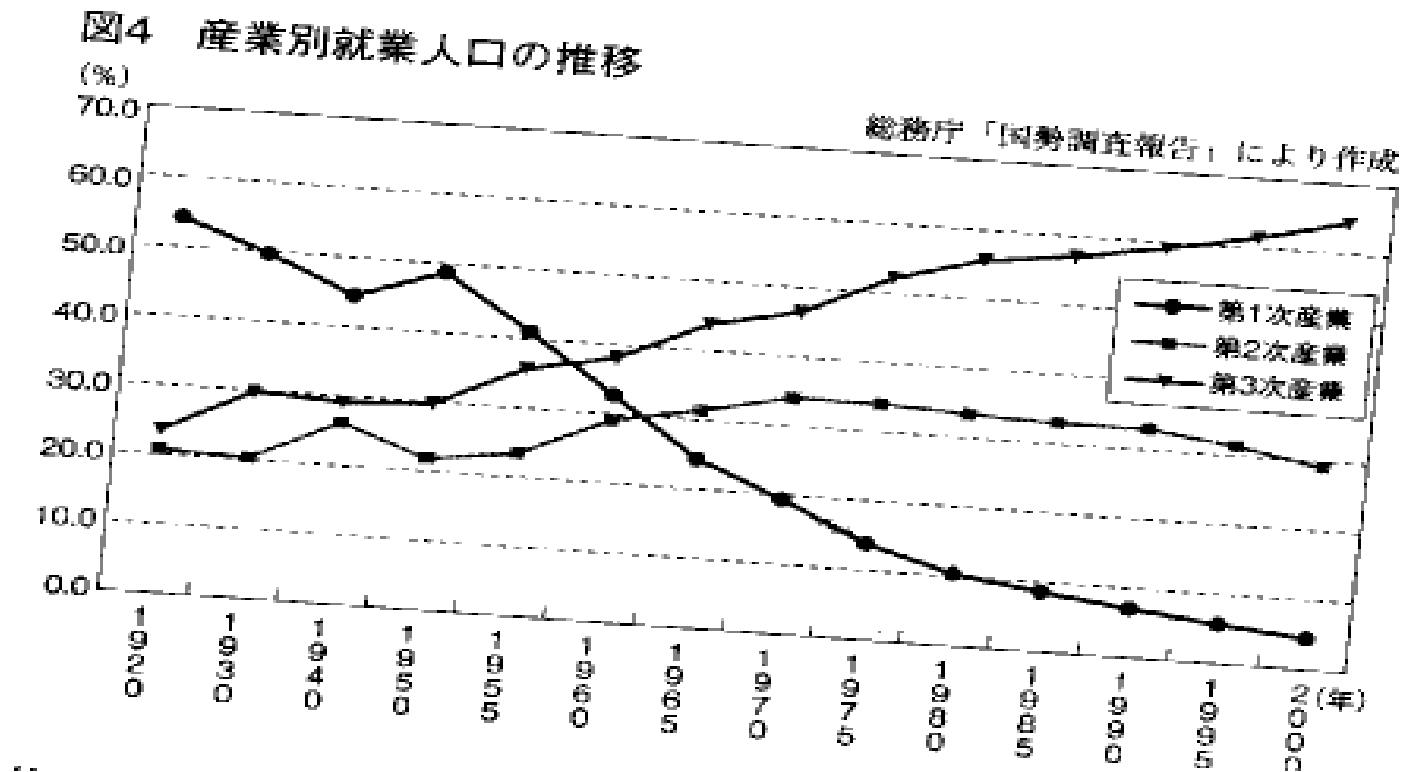
< 1950年代までの長期欠席の事由 >

- 疾病
- 経済困窮
- 親の無理解
- 勉学意欲の乏しさ（怠学）

学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷①

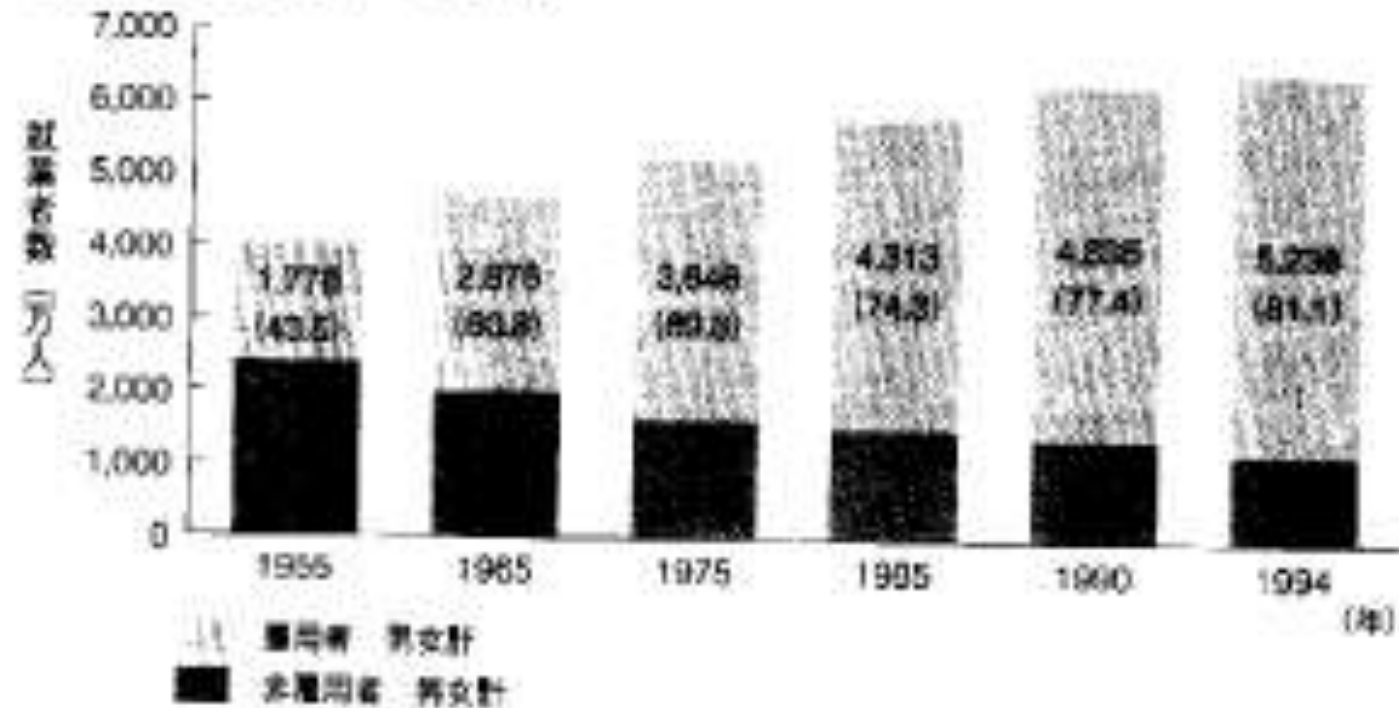
1950年代までの産業構造：主たる産業＝第一次産業（農林水産業）

→学校で学ぶ「知識」より、実地で学ぶ「技能・勘」を大事にする人も多かった。



学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷②進むサラリーマン化

図5 進むサラリーマン化



資料：総務庁『労働力調査年報』

学校へ通う意味の変遷と不登校

学校制度が定着した理由①

- 身分制度の解体と、子に受け継がせる家業の喪失
- 立身出世への数少ない道
- 高い知識や文化にアクセスできるほとんど数少ない場

学校へ通う意味の変遷と不登校

学校の聖性（よい権威）

身分制度解体後の大人へのルールであり、豊かさへの唯一の道であり、高い知識や文化にアクセスできる数少ない場である学校は、「貴重で尊い場所（聖性）」「大事なところ」という感覚が徐々に社会に共有され、学校の先生は「聖職者」で権威を持ち、教科書は捨てる事の出来ない大事なものと認識された。この事が、子ども達を登校に促す大きな力になっていた。

1950年代末～60年代初め

：新しいタイプの長期欠席者（最初の不登校）

：学校恐怖症

典型例：都会の小学校低学年の児童。年の豊かな家庭で育ち、性格は大人しくてまじめ。勉強は好きで成績も上位。親の教育への理解も高い。友達との関係も良好。担任との関係も良い。しかし、なぜか登校できなくなる。頭痛・腹痛などの不定愁訴を訴えるが、医者に診せても悪い所はなく、学校でもいじめ等の問題も見いだせない。本人に尋ねても、本人も説明できない。自分から「学校へ行きたい」といって前夜は準備を整えて寝るが、いざ朝になると玄関を出れない。やがて、少しでも登校をうながされたり、学校のことに触れられたただけでもパニックになり、全くの不登校状態に陥る。

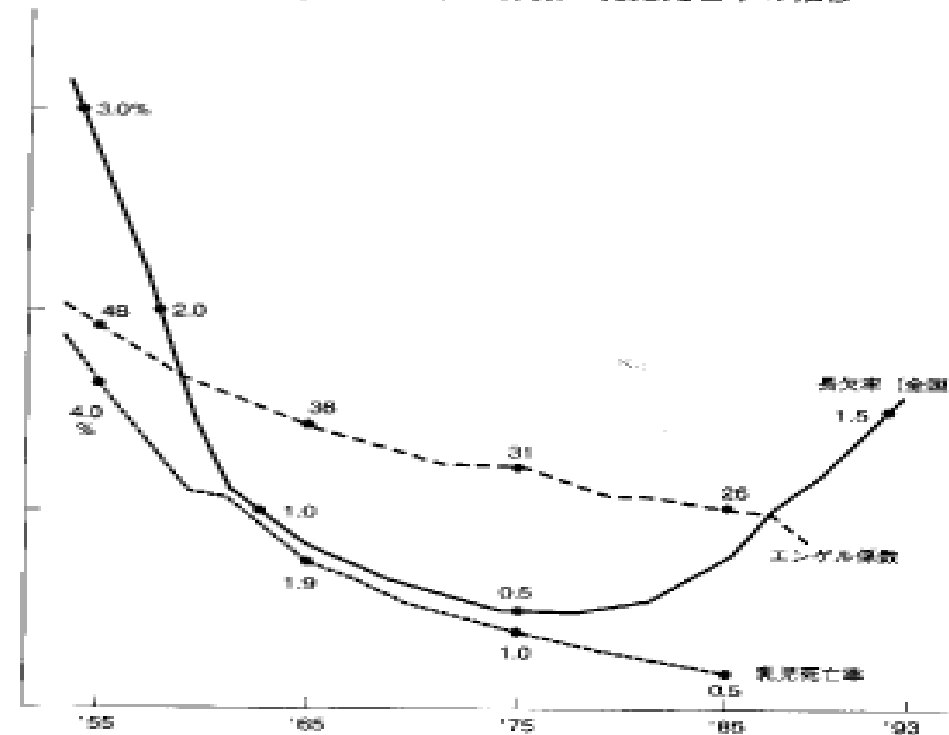
学校へ通う意味の変遷と不登校

- 学校恐怖症（A. M. ジョンソン）
- 背景：裕福で手厚い養育環境で育てられた繊細で知的な児童が、初めて出会うラフな集団生活にぶつかって、不安になっていると考えられた。親元から離れて学校で過ごす事の不安（分離不安）が、原因と考えられた。
- 影響：社会全体では長期欠席が激減し、学校へ行くのが当たり前になっていく世の中で、本人・周囲の焦りと不安は大きかった。
- 対応：焦りと不安が2次的な混乱をもたらすため、登校刺激を一切せず、学校を休むことを保証し、その間に本人の自律性をのばしさえすれば、勉強への意欲や能力は高いので、おのずと登校できるようになるとされた。

学校へ通う意味の変遷と不登校 学校制度が定着した理由②

経済的・文化的発展が、疾病・経済困窮・親の無理解で欠席する児童を減らした。

図3 長欠率〔中学生〕とエンゲル係数・乳児死亡率の推移

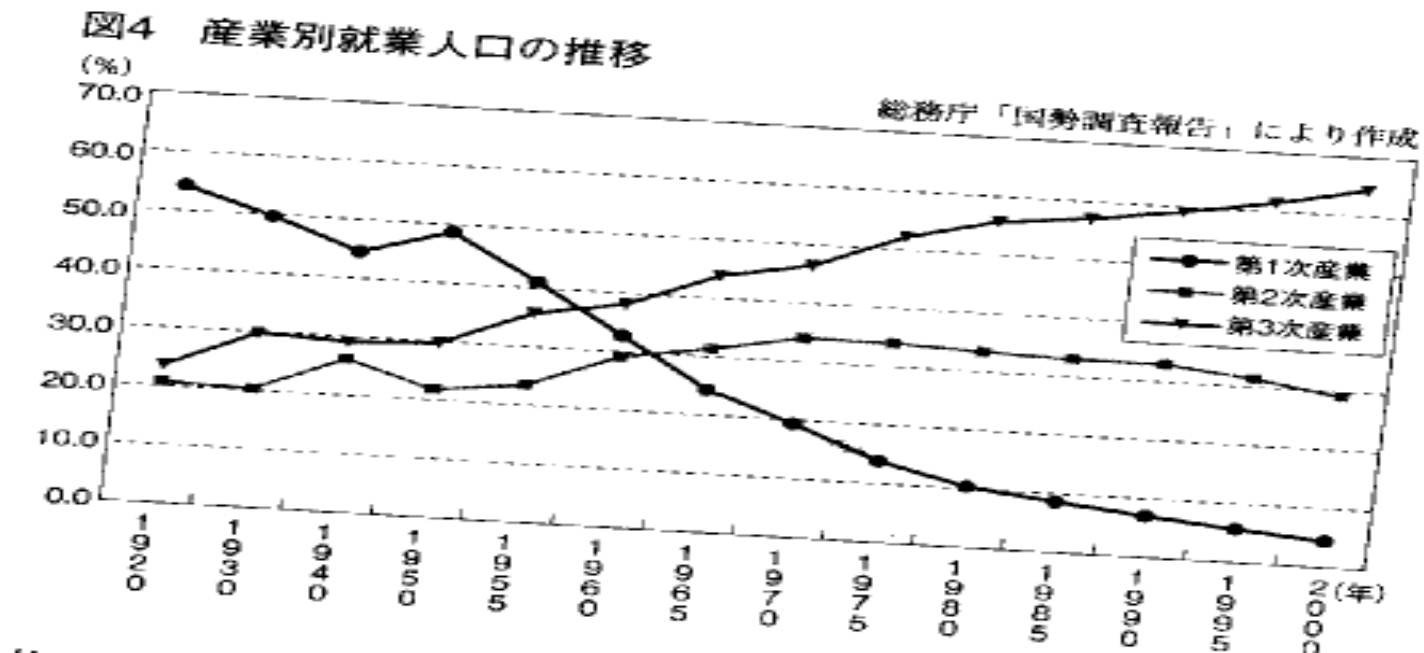


学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷③

1960年代の産業構造

第2次産業（工業・製造業）が主役の時代

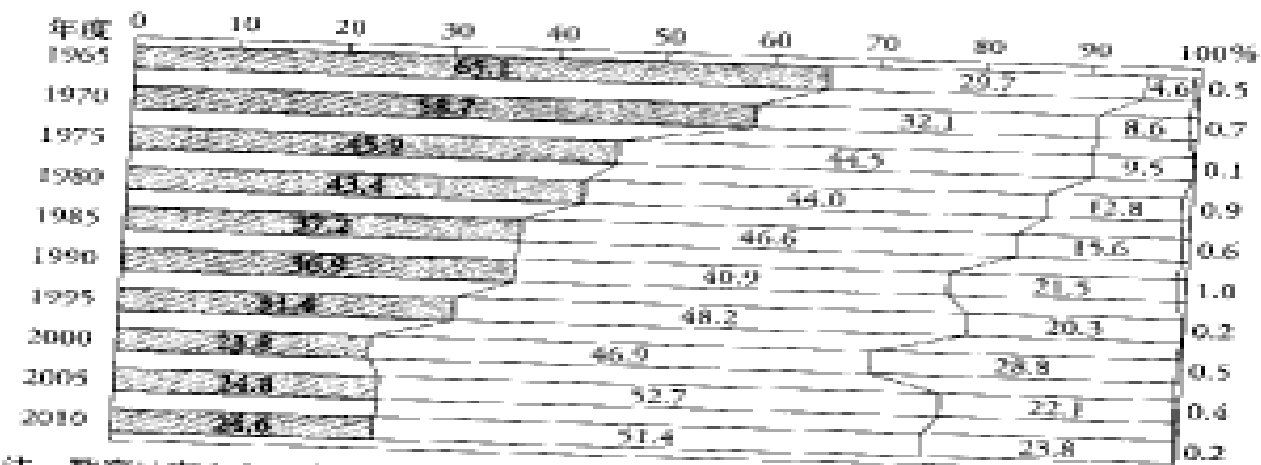
→学校で学ぶ「知識」「集団規律」「勤勉性」が、工業・製造業の仕事に活きる。



学校へ通う意味の変遷と不登校

勉強への意欲の推移：1960年代の学ぶ意欲は高かった

★ 28 勉強への意欲



注 数字は左から、もっと勉強をしたい、いまくらいの勉強がちょうどよい、勉強はもうしたくない、無回答。

藤沢市教育文化センター「第10回学習意識調査書」より(藤沢市教育文化センターは5年ごとに市内公立中学校3年生を対象に詳細な学習意識調査をしている。そのデータから引用)

学校へ通う意味の変遷と不登校

広がる不登校：思春期の不登校：登校拒否

典型例：小学校中学校と成績抜群で、同級生からの信頼も厚く、いつもクラスを中心にいた。父親も高学歴で企業の要職に在り、優秀な我が子に期待をかけ、たえず上校を目指すように求めた。彼もそれによく応えて難関高校に入学。しかし2学期になり、学校を休み始める。父が注意すると「こんな高校は面白くない。つめこみばかり。いっても無駄」と反発。父と口論になる。しかし、高校は退学するでもなく、行けず、ひきこもった生活となり、家庭で学校の事を持ち出されると暴力が出るようになった。

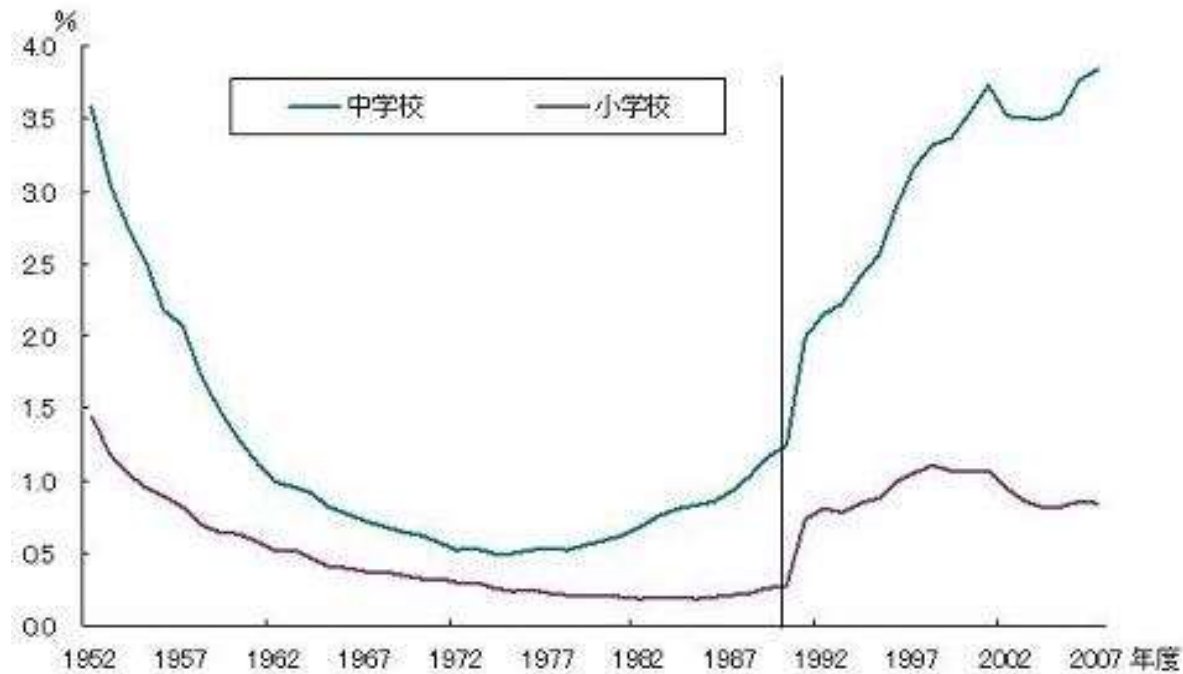
学校へ通う意味の変遷と不登校

1960年代の思春期の登校拒否

- 背景：思春期の心理的自立の課題、周囲より上に立ててきた優秀な生徒が、上に立つことが出来なくなった時の回避。
- 対応：必要に応じて休学などの手続きをとってゆっくり休ませ、休んでいる間に、改めて自分の身の丈や向かうべき将来像をさぐる試行錯誤をカウンセラーなどと共にし、それが内面的な交流体験・成熟体験となる事を目指すケアが支援の定石だった。

学校へ通う意味の変遷と不登校 豊かで近代化した社会での長期欠席率

戦後の長期欠席率



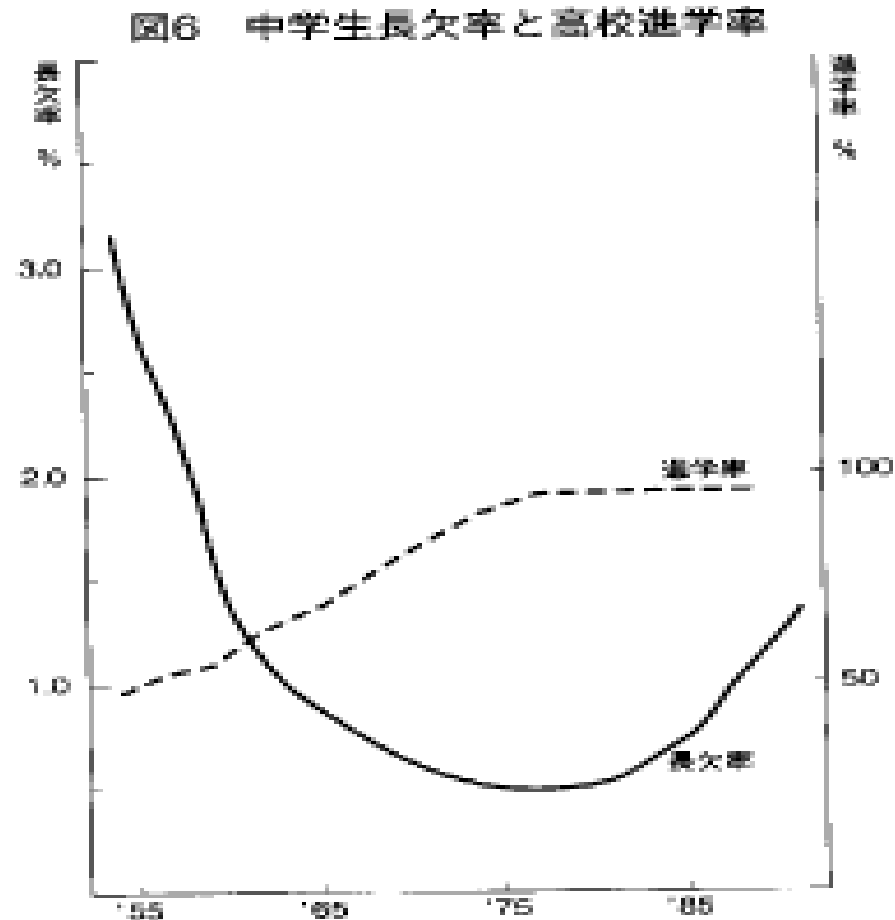
学校へ通う意味の変遷と不登校

1970年代以降の不登校

1970年代以降の不登校のは、典型例群ばかりではなくなかった。特異な条件をもった少数の子供にだけ起きていた不登校現象が、そうした条件なしでもおきる一般性の高い現象に代わってきた。誰にでも起きうる現象となった為の増加で、典型例のような特徴がはっきりしたものは減り、怠学との区別もつきにくくなり、より包括的な呼称である「不登校」がひろまり現在に至る。

学校へ通う意味の変遷と不登校

高校進学率上昇と中学生の長期欠席率



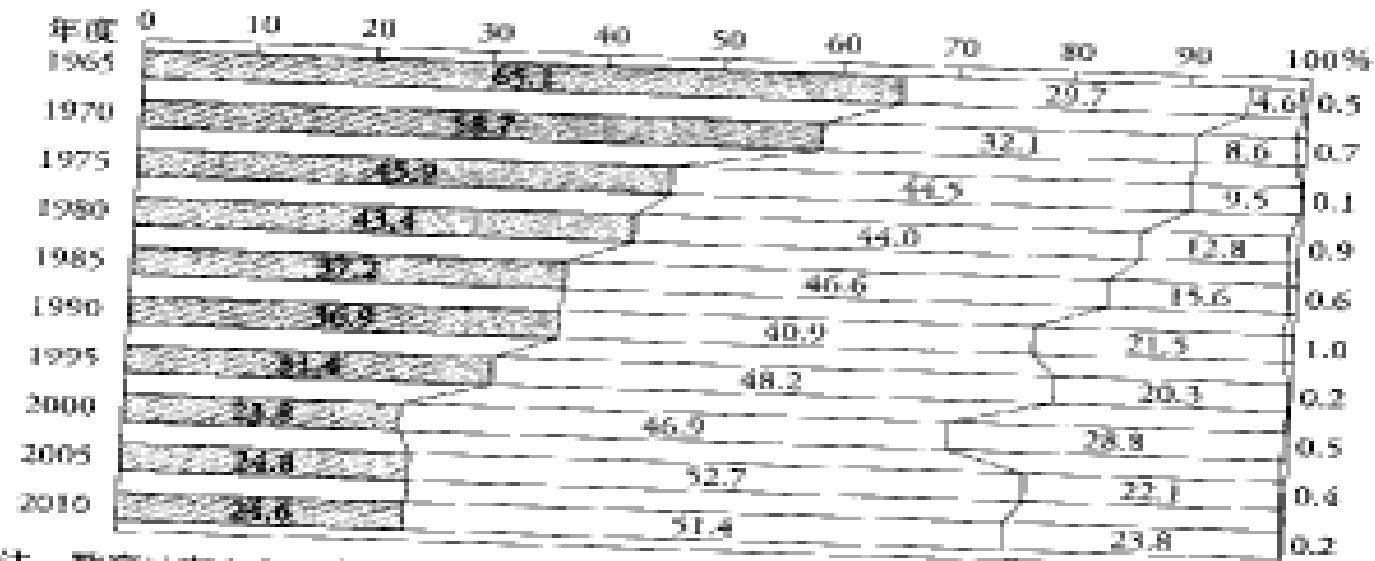
学校へ通う意味の変遷と不登校

<高校進学率上昇が学校にもたらした問題>

- ほとんどの国民が高等教育を受けることが出来るようになった。
- 高等教育の相対的な価値が下がる。
- 高等教育の学歴を得なければ、マイノリティーになる可能性が高く、不安が増大する。
→勉強意欲の低下

学校へ通う意味の変遷と不登校 勉強意欲の低下

★ 28 勉強への意欲

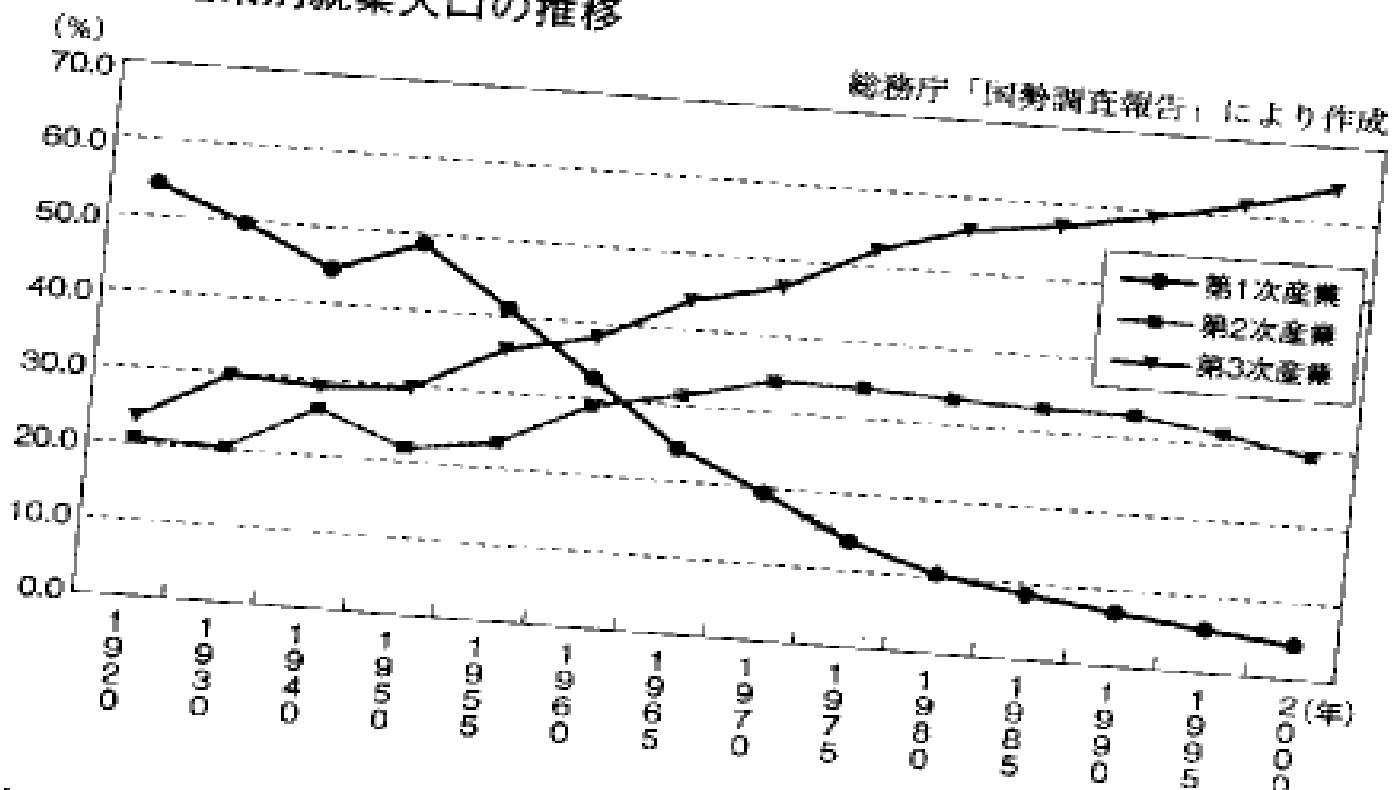


注 数字は左から、もっと勉強をしたい、いまくらいの勉強がちょうどよい、勉強はもうしたくない、無回答。

藤沢市教育文化センター「第10回学習意識調査」より(藤沢市教育文化センターは5年ごとに市内公立中学校3年生を対象に詳細な学習意識調査をしている。そのデータから引用)

学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷④

図4 産業別就業人口の推移



学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷④

1970年代の産業構造

- ：第3次産業（商業・サービス業など消費産業）人口が50%を超す
 - 自然・物を相手とする仕事から、人を相手にする仕事が多数を占め、「対他配慮」「コミュニケーションスキル」「社会性」を学ぶ必要性が増す。
 - 高度消費社会では、個人それぞれの欲望や権利意識が拡大するため、より繊細な「対他配慮」が求められるようになる。
 - 学校で訓練しやすい「集団規律」「勤勉性」以上に「対他配慮」「コミュニケーションスキル」「社会性」が求められやすい社会へ。

学校へ通う意味の変遷と不登校 社会構造の変遷④

<高度消費社会が学校にもたらした問題>

- 学校で訓練しやすいものである「集団規律」「勤勉性」と、労働の場で必要とされやすいものの間にギャップが出てくる。
第3次産業の場では、個人の欲望や権利意識を認めた上での「対他配慮」が特に必要とされやすい。
- 学校で子どもたちの対人緊張が高まる。
- 発達障害と理解される子どもたちの増大。
- 個人の欲望や権利意識が強くなり、学校の聖性（よい権威）が縮小。

学校へ通う意味の変遷と不登校

豊かで発展した社会になった事から増大した不登校

- 1970年代以降の、不登校の増大は、貧しい社会から、豊かな消費社会に社会構造が転換したのに伴い、子ども達・大人達の、教育や学校への価値観・意識・感覚が変わったことから起きている事が考えられた。児童生徒を学校へと向かわせる力（学校の聖性など）は弱まった反面、学校生活をストレスと感じさせる力（対人緊張など）は強まっていると考えられる。現在は、学校に行かずともインターネットで知識を得ることが出来、ネットの中の子どもたちの人間関係も複雑化している為、この傾向はさらに強まっている事も考えられた。この為、さまざまな児童生徒が簡単に不登校になりやすい状況があるだろう。
- 一方、現代社会では、家業が廃れ、子ども達が家庭の外で社会的な体験を重ねる場が、ほとんど学校しかない。その為、あまりに長期の不登校は大人への成長の糧を減らしてしまう為、対処は必要となる。また、現代の不登校児童生徒は、典型がなく様々である為、個々に応じた対応が望まれる。

現在の不登校への対応

<不登校長期化へのよくある流れ>

- 学校に行くのが嫌になるなんらかの問題がでる。
- 何日か休む。
- 学校へ行ってもほしい親と対立。
- 自分の部屋に引きこもる。
- 学校へ行かない事で、体力・学力などが落ちる。久しぶりの友人との関わりがよけいに不安になる。

現在の不登校への対応

家族の対応

<家をよきベースキャンプにする。>

- 休む時の枠組みを決める
 - 「お腹が痛くて休みたい」場合、医者連れて行き、医者の判断で休むかどうか決める等、休んでいい時の条件を決めておく。
 - 規則正しい生活など、学校にもどる為の体力維持のためのルールなどを作る。
- 枠組みの中で休んだからには、安心して家に居ることができるよう努める。
 - 子どもが楽しめることがあるようなら、ぜひさせる。
 - 状況を話せる子どもの話はよく聞き、話せない子どもは見守る。

現在の不登校への対応

家族の対応

<学校の先生とつながりを持つ>

日常の学校での本人の様子を知っているので、不登校の原因を一緒に考えやすい。担任だけではなく、学年主任や養護教諭が情報を持っている事もある。いじめなど、学校の環境に問題がある場合は調整してくれる。不登校中の学力の維持などにも協力してくれる事も多い。学校の先生が持っている、進路の情報などが不登校から脱却するチャンスになる事も多い。

現在の不登校への対応 家族の対応

<学校の先生とつながりをもつ>

～新潟県の取り組み～

「こどもとともに1・2・3運動」

- 1日目：欠席過程に連絡し、保護者または本人から状況を聞く。
- 2日目：児童生徒の具体的な状況を電話により把握する。
- 3日目：家庭訪問を実施し、保護者または本人と面談する。

現在の不登校への対応

家族の対応

<専門家とのつながりを持つ>

スクールカウンセラーや、スクールソーシャルワーカーなどが、問題をアセスメントする場合もある。スクールカウンセラーは認知行動療法などの技術で、スモールステップで学校へ行くためのプランを考ることも多い。スクールソーシャルワーカーが、教育センターや民間の不登校支援団体などを紹介してくれ、そうした施設で体力や学力をつけて登校に備える方法もある。

現在の不登校への対応

家族の対応

<医療機関とつながりを持つ>

- 不登校になる時「お腹が痛い」「頭が痛い」といった身体愁訴を訴えることは多いが、実際に身体に問題がある事もあるので、医療機関は受診したい。それが子どもの訴えを受け止めることになり、安易に学校を休ませない姿勢を見せることにつながる。また、社会不安障害やうつ病など精神的な病を併発している可能性もある。発達障害の問題がある場合、診断を受けると福祉的な対応も受けやすくなる。

現在の不登校への対応 家族の対応

家族が外部とつながる事が、
子どもを外部と繋げることに繋がります。

E n d

参考文献

- ・平成28年度児童生徒の問題行動不登校など生徒指導上の諸問題に関する調査（文部科学省）
- ・日本の学校教育の普及過程 泊史
- ・学校へ行く意味・休む意味 滝川一廣
- ・子どものための精神医学 滝川一廣
- ・不登校の本質 小野昌彦
- ・新潟県教育委員会平成29年度スクールカウンセラー等活用事業手引き